

現代建築家の『陰翳礼讃』を引用した言説における闇の認識

奥山研究室 17B07003 櫻井 千尋 (SAKURAI, Chihiro)

1. 序 日本の建築空間における闇に言及した著名な論考として、谷崎潤一郎の随筆『陰翳礼讃』がある。その内容は、日本の伝統的な物品や建築空間、生活様式に現れる陰翳美の世界観を谷崎独自の視点から記述したものであり、国内外の多くの建築家に影響を与え続けてきた。特に、建築家による『陰翳礼讃』を引用した言説からは、谷崎による論から展開された様々な主張を読み取ることができ、これらは建築において重要であるが直接的には見出しにくい闇の概念を間接的に扱おうとするものと言える。そこで本研究では、『陰翳礼讃』を引用した建築家の言説を資料とし¹⁾、その内容を検討することで、建築における『陰翳礼讃』の位置付けと、建築家の闇の認識の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 『陰翳礼讃』からの引用箇所と引用対象

2-1. 『陰翳礼讃』の引用箇所 資料とした言説から『陰翳礼讃』の引用箇所を抽出し、その内容を検討した(図1)。「陰翳礼讃」は16の章で構成されており、引用箇所が明確なもの²⁾は各章との対応を、明確でないものは『陰翳礼讃』全体に言及³⁾とし、その数を図2に示した。日本建築を主題とした⑧⑨⑩章や、廣間の闇を描いた⑭章が多くみられた。

2-2. 引用対象の分類 次に、建築家が『陰翳礼讃』の何に関する記述を引用したのかを捉えるために、引用箇所におけ

る記述の対象(以下、引用対象)を検討した。その結果、和紙や漆器などの具体的な物品に関する〈物体的対象〉、広間や床の間といった〈空間的対象〉、美や西洋文化といった〈概念的対象〉(以下、〈物体〉、〈空間〉、〈概念〉とする)に分類した(図3)。「物体」では[金襴・金屏風]、〈空間〉では[広間(松の間)]、[座敷・書院の窓]、〈概念〉では[美]が多くみられた。さらに、引用対象のもつ性質が読み取れたため、その内容を検討し、色やかたちなどの〔視覚〕、柔らかさや静けさなどの〔聴覚・触覚〕の2つで捉え、図3に対応を示した。

3. 『陰翳礼讃』の引用根拠と闇の認識

3-1. 『陰翳礼讃』の引用根拠 次に、資料とした言説から『陰翳礼讃』を引用することでどのような論を展開しているのか読み取れる箇所を引用根拠として抽出した(図4)。これらの意味内容をKJ法を用いて相互に比較検討した結果、日本の伝統建築や都市空間を現代の視点から再解釈する《日本の伝統を再解釈》、建築素材や色、照明など建築設計の方法を思考する《設計手法を抽出》、闇や光を通して建築を捉え直す《建築観を再考》の3つの大枠で捉えられた(以下、《伝統》、《手法》、《建築観》)。

3-2. 闇と光の認識 資料の中には引用をする前提として、建築家が闇と光のいかなる様態に着目したか読み取れるものが

No.1 闇の空間 (1964, 磯崎新)		引用部分
谷崎はこのエッセイのなかで、日本の建築空間がすぐれて闇そのものにひたっていたのではない、その闇のなかにきらめく光のつくる陰翳こそが空間をきわだたせ特徴づけたと考える。「昔の御殿や妓楼などでは、天井を高く、廊下を広く取り、何十畳敷きという大きな部屋を仕切るのが普通であったとすると、その屋内にはいつもこういう闇が狭霧の如く立ち込めていたのである。…分けても屋内の「眼に見る闇」は、何かチラチラとかけらうものがあるような気がして、幻覚を起し易いので、或る場合には屋外の闇よりも凄味がある。」		引用箇所 直接引用 - ④章 引用対象 廣間(松の間): 空間
…しかし、彼の日本の建築空間の鋭い洞察と、光と影とが作りだす美意識を発掘した点は、敬意を表わずにはいられない。空間とはどだい闇ではなかったかという実感を、ぼくは抱かされた記憶があるからだ。…日本の空間にはたちこめる闇がかならずつきまとう。そういう闇は対位法とはなれない。絶対的な暗黒であり、あらゆる現象がそれを背景としてはじめて起りうるような、ぼくらの観念を内側からささえている何にものかだ。		引用根拠 空間における闇の概念を考察 gl 空間の認識を再考 闇と光の認識 闇そのもの - 闇と光を個別的に捉える

図1: 分析例

章	主題	被引用回数 (83)
①	純日本風の部屋	1
②	日本の闇 G	2
③	身の回りのもの	1
④	東洋文化の闇 O	2
⑤	和紙と西洋紙 A	5
⑥	漆器 C	6
⑦	羊羹、日本料理 D	2
⑧	日本建築 JK 美 M	11 7 18
⑨	日本座敷 I, K	8
⑩	金襴、金屏風 E	8
⑪	能、歌舞伎と照明	1
⑫	女性 F、東洋人 N	3 4
⑬	肌の色 N	2
⑭	闇の色 H、女性 F	2 8 10
⑮	まちの明るさ L	2
⑯	都会と老人	1
『陰翳礼讃』全体に言及		14

図2: 『陰翳礼讃』各章と被引用回数

〈物体的対象〉 26		〈空間的対象〉 30		〈概念的対象〉 13	
A 和紙 ―対象― 該当章: ⑤ 「同じ白いでも、柔かい初雪の面のよう / 手ざわりがしなやかで、」 ―記述内容―	性質 (聴覚・触覚) 色 (触感) 性質 (視覚)	G 廁 ある程度の薄暗さ ... / 蚊の呻りさえ耳につくような静けさ ...	② (静寂)	M 美 ⑧ 美と云うものは常に生活の実際から発達するもので ... / いつしか陰翳のうちに美を発見し ...	7
B 食器・器物 ⑤ 時代のつやなどと云うとよく聞えるが、実を云えば手垢の光りである ...	光沢	H 廣間 (松の間) ただ一と色の闇 / 灯に照らされた闇 / 立ち込める霧のような暗さ ...	⑭ 色	N 東洋人 [民族] ⑫ ⑬ 暗がりの中に美を求める傾向 ... / なんでもない所に陰翳を生じせしめて美を創造する ...	4
C 漆器・金蒔絵 ⑥ 残重もの闇が堆積した色 ... / あのピカピカ光る肌のつやも ...	色 光沢	I 床の間 凹みの此処彼処へ朦朧 (もうろう) たる隈 (くま) を生む / 無気味な静かさ	⑨ (形態) (静寂)	O 西洋 [文化] ④ 西洋の方は順当な方向を辿って今日に到達したのであり、我等の方は、儼然な文明に達達してそれを取り入れざるを得なかった ...	2
D 日本料理・羊羹 ⑦ 深みのある、うまそうな色 / 暗黒が一箇の甘い塊になって舌の上で解け ...	色 光沢 味 (触感)	J 日本建築 (庇、屋根) 建物の上にあらず大きな壁を伏せて ... / 屋根の方が重く、大きく、堆く、面積が大きく ...	⑧ (形態)		
E 金襴・金屏風 ⑩ ぼうつと夢のように照り返している ... / 弱々しい金色の明りを投げている ...	色 光沢	K 座敷・書院の窓 ⑧ ⑨ 庭からの反射が障子を透してほの明るく ... / もはや物を照らし出す力もなくなり ...	⑧ ⑨ (形態) 色		
F 女 (顔、口唇、鉄漿) ⑫ ⑭ ある種の人間離れのした白さ ... / 青い唇の間からとき／＼潤滑色の面を ...	色	L 東京や大阪 / 石山寺 東京や大阪の夜は格段に明るい / 電燈やイルミネーションを飾り、賑々しく ...	⑮ 色 (音)		

図3: 引用対象の分類と記述内容

ある。これを闇と光の認識として検討し、闇と光を個別的に捉える【闇そのもの】、【光そのもの】と、闇と光を合わせて捉える【暗さ・陰影が引き立つ】、【光が暗さによって引き立つ】（以下、【闇】、【光】、【暗さ】、【光が引き立つ】）から捉えた（図5）。

3-3.『陰翳礼讃』の引用を通じた闇の認識 前節で捉えた闇と光の認識ごとに引用根拠を検討し、さらに前章で検討した引用対象の内訳を合わせて示したものが図6である。【闇】では、『建築観』が多く、その中でも〈空間〉の引用が多くみられた。特に「灯に照らされた闇の色」といった空間の色に関する記述への着目が多く、谷崎の記述から闇の概念やイメージの着想を得ることで、建築空間そのものを考察する手がかりとしているものと考えられる。また、【暗さ】においては『伝統』が多く、その引用対象は多岐に渡ることから、日本の伝統を再解釈しようとするにあたって、谷崎が『陰翳礼讃』の中で記述した様々な題材から示唆を得ようとする建築家の姿勢がよみとれる。【光が引き立つ】では『手法』が多くみられたのに対し、【光】では『建築観』が多くみられたが、双方とも〈物体〉の【聴覚・触覚】に着目した記述の引用が大半を占めた。これらを総合すると、〈空間〉に着目する場合は闇へ、〈物

体〉に着目する場合は光への傾向がみられ、空間の闇という「地」の中に光る「図」としての物品という、谷崎が『陰翳礼讃』の中で示した構図に対応した傾向がある。また、闇と光を合わせて捉える場合は『建築観』が多くみられたことから、伝統や設計を考える際は陰翳の現象的な様相のイメージを得ようとし、建築とは何かを考える際は、谷崎の表現を用いて闇と光の持つ意味的側面を補強しようとする人が多いと考えられる。

4. 結 以上、『陰翳礼讃』を引用した現代建築家の言説から、『陰翳礼讃』の位置付け及び闇の認識について検討した。その結果、物体的対象に着目する場合は光へ、空間的対象に着目する場合は闇への傾向がみられた。また、闇と光を合わせて捉える場合には、日本の伝統や設計手法に関わる論が展開されるのに対し、闇か光いずれか一方のみを問題とした場合は、谷崎による記述から示唆を得ることで、建築そのものを捉え直す基盤しようとする建築家の思考を見出した。

註 1) ここでは、日本国内で発表された現代の建築家による言説のうち、『陰翳礼讃』を引用し、そこから論旨が展開されているものを資料としている。国立国会図書館 cinii books、Google Books 等の検索及び 1970 年以降の『新建築』『住宅特集』『建築文化』『都市住宅』から収集した。全 46 資料のうち書籍 25 資料（一般誌含む）、雑誌 29 資料（新建築 12、住宅特集 2、建築文化 6、都市住宅 1、その他 8）

2) 引用には、『陰翳礼讃』の本文を直接引用したものと、筆者の言葉で言い換えたものがみられた。（全 83 の引用数のうち、直接引用 56、間接引用 27）

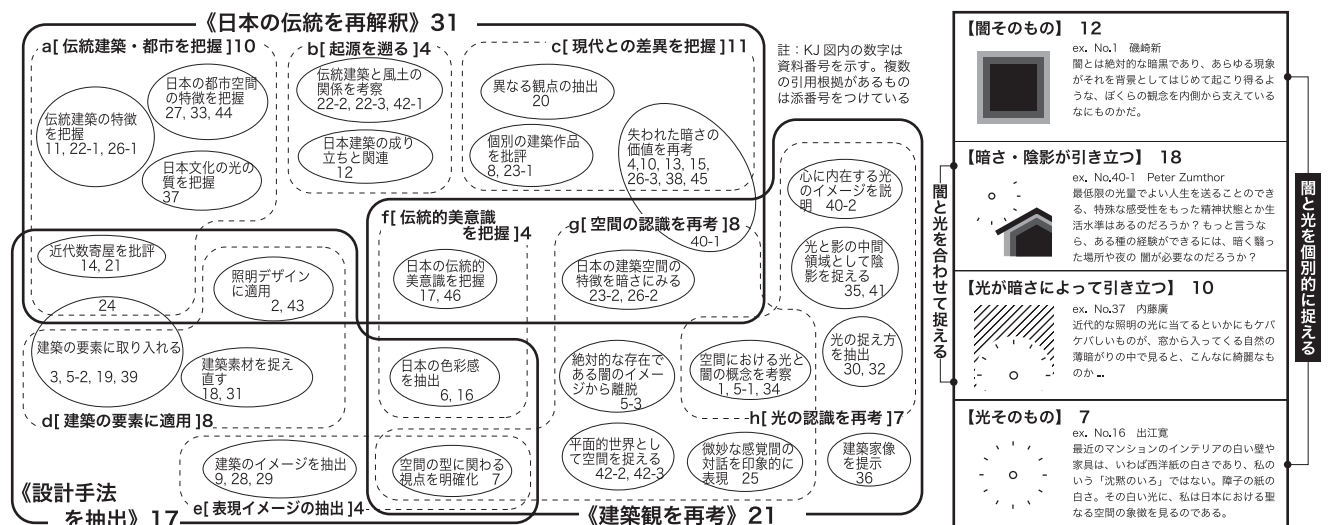


図 4：引用根拠の意味内容（KJ 図）

図 5：闇と光の認識

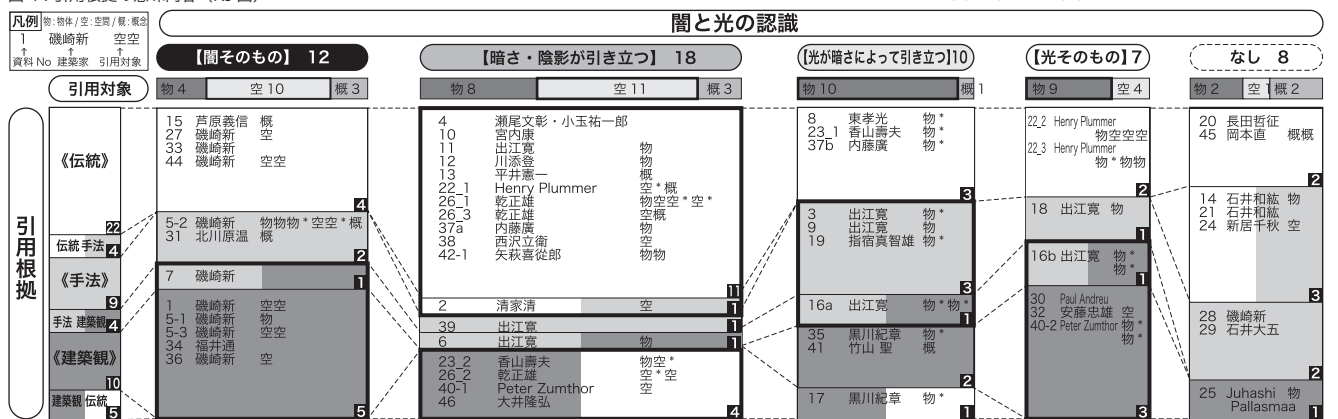


図 6：闇と光の認識と引用根拠の意味内容

図註：引用対象で（聴覚・触覚）は記号に * を付けている。複数の認識が見られるものは資料番号に a, b, ... と付している